

<論文>

北海道大学教育学部創設時における幼児教育の実態

—城戸幡太郎に着目して—

鈴木慎一郎

On Early Childhood Education in HOKKAIDO UNIVERSITY Faculty of Education at the Foundation Period:

Focusing on KIDO Mantaro

SUZUKI Shinichiro

キーワード：北海道大学教育学部，幼児教育，城戸幡太郎，北大幼児園，実践研究

Key words:HOKKAIDO UNIVERSITY Faculty of Education, Early Childhood Education, KIDO Mantaro, HOKKAIDO UNIVERSITY Kindergarten, Studies on Practices

はじめに

本稿の目的は、北海道大学教育学部創設時における幼児教育の実態を城戸幡太郎に着目して明らかにすることである。

1949(昭和24)年、北海道大学に教育学部が創設された。創設には、城戸幡太郎(1893-1985)がかかわり、1951(昭和26)年、学部長として着任する¹。1952(昭和27)年5月、野外保育を開始し、11月、「北大幼児園」が発足し、古電車3台を保育室に改造し、地域の保護者が結成した「にれ楡の会」が経営を担い、120名の園児で「電車の幼稚園」が開園する。1966(昭和41)年、文部省の行政指導を受け、幼児園は廃止されたものの、発達心理講座の「実験保育室」、1978(昭和53)年には「附属乳幼児発達臨床研究センター」として引き継がれた。2006(平成18)年、「附属子ども発達臨床研究センター」と改組されるものの、2010(平成22)年3月、幼児園については廃止となる(表3)。

先行研究としては、間宮正幸「今日の間人発達科学と発達教育臨床の研究：「城戸構想」から「子ども発達臨床研究センター」へ」(2007)が挙げられる²。「城戸構想」を丁寧に分析した後、北大幼児園も取り上げ、北海道大学教育学部卒業生にもインタビュー調査を行い、貴重な研究である。しかし、北海道大学大学院教育学研究科の改組が主たる研究目的のため、北大幼児園に焦点を当てた研究ではない。また、吾田富士子によって、奥田三郎(北海道大学教育学部教授)との関係で、北大幼児園に関する若干の記述が見られる³。

ところで、筆者は戦前から戦後の保育者・教員養成機関の再編に着目し、事例の検証を行っているけれども⁴、国立大学附属という組織ではない、北海道大学のようなケースは希少である。また、北海道大学には保育者養成の機能はない。そのような環境の中、北大幼児園ではどのような経緯で創立され、どのような保育が展開されていたのだろうか。さらに『幼児教育論』(1939)の著者であり、保育界においても重鎮的な存在であった城戸が、どのような保育実践を理想とし、試みようとしていたのかは注目に値する。

そこで本稿では、北大幼児園発足当初であり、城戸の影響を受けた1952（昭和27）年から1962（昭和37）年までの時期を主な対象とする。研究方法としては第一に、城戸の試みた北海道大学教育学部の構想を概観した後、北大幼児園が整備されていった経緯を沿革史に基づき明らかにする。第二に、北大幼児園の保育内容、保育環境を城戸の言及に基づき明らかにする。第三に、北大幼児園において進められた実践研究の内容、結果について、研究主任の三宅和夫の取り組みや「北海道保育問題研究会」の発足に着目して検証する。なお、資料としては、北大幼児園から出された『十年の歩み』（1962）、『北大百年史 部局史』（1980）、『写真でつづる教育学部50年（1949～1999）：21世紀を展望して』（1999）等を中心に取り上げる。

1. 城戸の試みた北海道大学教育学部の構想と北大幼児園の整備

（1）城戸の試みた北海道大学教育学部の構想

戦前の北海道帝国大学では、農学部、医学部、工学部、理学部と理系の学部のみで構成されていた。戦後直後の1947（昭和22）年、法文学部が設置され、念願だった人文系学部が加わった。1949（昭和24）年の新制大学発足に伴い、「北海道大学」と改称され、法文学部、教育学部、理学部、医学部、工学部、農学部、水産学部によって構成される。

まずは教育学部が新設された背景について少し整理しておきたい。1948（昭和23）年6月頃から、文部省と占領軍総司令部内の民間情報教育局（Civil Information and Education Section、以下、CIEと略記）の間で、国立大学再編成の原則が話し合われ、同月、文部省によって「新制国立大学実施要項」がつけられる⁵。ここには旧帝国大学において教育学部を新設する箇条は含まれていなかった。「昭和24年度概算要求関係」の資料においても、旧帝国大学の教育学部新設要求はまったくみられず、わずかに京都大学文学部に教育学科の新設と東京大学文学部教育学科の講座増設の要求があるだけであった⁶。しかし、CIEは、伝統ある大学に教育学部を率先して設けるべきだという示唆があり、7月、CIEの要望で、旧帝大総長会議が開かれる。文部省学校教育局長であった日高第四郎（1896-1977）は次のように回想する⁷。

文部省は各帝大と協議して新教育に必要なよき教師の養成を頼み、文学部にある教育学科を徐々に充実拡張して将来教育学部を作る方針を立てていた。ところがCIEのカーレーとイーブルズはそんな生ぬるい処置ではいけない来年から直ぐにでも教育学部を作れと文部省に迫った。私は文部省を代表してそう簡単に作れないという大学の意向を伝えたところ、直接大学総長と折衝するから総長会議を召集せよとのことだったのである。（中略）

ことにイーブルズは、非常な不満の色を顔に現わして、旧帝大は「頭を後に向けて前に歩いている」という表現をもって過去の特権にうぬぼれて、これに執着して前進の心構えがないというふうに言い放った。場は白らけた。各総長のおさえている不満が反射的に私の心に映ったので総長の代弁を私が勤めた。決して実意がない訳ではない。旧帝大にも欠点もあるが、何と云っても学問の水準は他にまさっている。日本の学術のためにもこの水準を落とす訳にはゆかない。各総長は少なくとも他の学部と対等の教育学部を作ることを目標にしているので、急いで作るといいものがないというまでであると応酬して譲らなかった。いよいよ皆の表情がこわばってしまったので一時休憩した。再開してイーブルズと論議した末、勢いかられたとでも言うのであろうが、意外にも各大学ともそんなに言うなら

教育学部を作って見せるということになってしまった。

C I Eの高等教育顧問のイールズ (Eelles Water Crosby, 1886-1963) と、「日本教育大学協会」の結成を勧奨したカーレー (V.A.Carley) は「師範だけでは充実した教員養成機関を作ることは不可能である。大学と協力して充実した教員を養成し、現在の教育者のもっている Inferiority Complex をなくす様にせよ」との意見も述べた⁸。

8月、イールズが北海道大学を訪れ、「札幌の師範学校と北大とが合併して教育者養成の責任を北大を負うてはどうか。又函館、旭川の師範学校を2年制コースの分校として北大に吸収併置し、それを小学校教員養成機関としてはどうか」との提案があった⁹。しかし、師範学校側に反対意見が強く、北海道大学教育学部は、単独で、教育行政専門家の養成、教育学研究者の養成を主たる目的とする学部を目指す。11月、「教育学部創設委員会」が発足し、教育学部長として、城戸幡太郎に就任を懇請することになる。城戸は、戦後、文部省の教育研究所の所長として、教育刷新委員会の委員となっていたが、公職追放の影響を受け、退職した。適格審査の結果は、「不適格ではないが当分は教育に関係しないように」との注意があった¹⁰。北海道大学の伊藤吉之助法文学部長から、学部長の要請があったものの、適格審査との関係もあり、当初は教育学部創設委員会の委員として任務し、伊藤が教育学部長も併任した。

城戸の教育学部への構想は、以下の通りであり、「教育科学」が強調されている¹¹。城戸は、従来の観念的、解釈学的な教育学を批判し、教育の事実から出発する新しい教育学を建設しようと働きかけ、1937(昭和12)年発足の「教育科学研究会」の結成をリードした¹²。同年、城戸は、冷害に見舞われた北海道を訪れ、農村の貧困問題を解決するための農民教育(農村の学校教育を含む)の確立、そのための原則としての教育の「生活主義と科学主義」の採用という認識を得た。城戸は「生活教育」を「体験主義或は表現主義の教育」と「労作主義或は生産主義の教育」とに分類し、前者に位置付けられる「綴方教育」を批判して「生産主義の教育」を主張した¹³。

その時のわたくしの構想は、これまでの教育学の体系からではなく、教育科学の立場から、とくに北海道の教育計画を問題として学部の構成を与えてみようというところにありました。教育科学の立場というのは教育の生活主義と科学主義の立場ということで、これは教育科学研究会のときからの立場です。また、戦後の北海道は日本のホープとして総合開発が計画されていましたが、かつての植民地の開発のようなものではなく、道民みずからの力で、道民のための開発をしなければならないのではないか、とくに農業はこれまでのようなやり方ではどうにもならないのであって、大農組織や機械導入などもいろいろと検討してみることが必要ではないだろうか、そしてこのような開発に教育はどう貢献することができるかを北大教育学部で研究し教育してみようと考えました。

具体的には、教育学部は「第一部(教育科学科)」と「第二部(教育技術科)」で構成された。「第一部(教育科学科)」には「教育計画学科、教育史学科、産業教育学科、生活教育学科、社会教育学科、学校教育学科、教育制度学科、特殊教育学科、衛生教育学科、教育施設学科」、「第二部(教育技術科)」には「芸術学科、体育学科、職業学科、家政学科」が置かれた¹⁴。

ところでイールズは1949（昭和24）年7月、新潟大学開学式の祝辞において共産主義者を大学から追放すべきことを公式に主張し、レッド・パージ政策に転換する¹⁵。10月、日本学術会議決議では批判的意見表明が決議される。しかし、イールズらの反共講演行脚が計画され、11月の徳島大学を皮切りに1950（昭和25）年5月の岩手大学にいたる6ヶ月余りの間、二日続きの講演会・懇談会を全国30都道府県で行う¹⁶。

1950（昭和25）年5月、北海道大学にイールズ、成人教育係のタイパー（D. M. Typer）、ニューフェルド（Newfield）¹⁷が訪れ、イールズが講演を行う。共産主義教授追放の主張に学生、教職員が抗議して、「北大イールズ闘争」（図1）とも呼ばれ、退学4名、無期停学4名、停学1年1名、^{けんせき}譴責1名を出し、日本共産党北大細胞公認取消に関する告示が決定され、伊藤誠哉学長は引責辞任した¹⁸。



図1 北大イールズ闘争

出典 『写真集 北大百年』北海道大学、1976年、165頁。

上記の「芸術学科」と「体育学科」を組み込んだ城戸の構想には、プラトン（B.C.427-347）『国家』の思想も根底にあった。結局、文部省からは正式には認められず、教育学科のみでの発足となったが、大学独自の判断で、1950（昭和25）年度から「体育専攻・音楽専攻」の学生募集が始まる（表1）。城戸は次のように回想する¹⁹。

文部省に何とか学科か講座として認めさせたいと思い、日高第四郎さんが文部次官であったとき、奥さんが音楽学校出身でもあり、音楽には理解があると思って直接談判をしたことがありました。日高さんは、正式には認められないが大学がやるならやるなどとは言わない、という消極的な好意を示されたので継続してやることにしました。

しかし、1952（昭和27）年度限りで、学生募集は停止される²⁰。

他方、発足当初から「特殊教育講座」が設置され、障害児教育の研究・教育や教員養成を行った²¹。保育者養成は行っていないが、表2の通り、幼児教育関係の科目が複数開講された。

表1 1952(昭和27)年の教員

専攻	講座	
教育科学	社会教育 教育史学 教育制度 学校教育 社会教育	教授 留岡清男 教授 鈴木朝英 教授 橋本俊彦 助教授 砂沢喜代次 講師 佐々木隆介 助手 金木藤雄
職業教育	職業教育	教授 三井透
家庭教育	家庭教育 家庭教育	教授 籠山京 助教授 中川時代
養護教育	教育衛生 特殊教育	教授 奥田三郎 助教授 木村謙二 助手 山本普
体育	体育科学 保健科学 体育科学 体育技術 体育科学 体育技術 体育技術 体育技術	教授 天野智恵美 教授 本田迪康 助教授 山崎久雄 助教授 阿部恕 助教授 奈良岡健三 助教授 有岡勇 助教授 宮崎兼光 助教授 中西信行 助手 室木洋一
音楽	音楽教育 音楽技術 音楽技術 音楽技術	教授 遠藤宏 教授 高折宮次 助教授 村井満壽 助教授 筒井秀武 助手 今掘美智子

出典 『北大百年史 部局史』1980年，419-420頁。

表2 1952(昭和27)年の幼児教育関係の科目

専攻	科目	科目名
体育	選択	幼児体育
家庭教育	必修 選択 選択 選択 選択 選択	保育学 児童文化 児童福祉 幼児体育 遊戯，ダンス実習 音楽実習
養護教育	必修 必修 選択 選択 その他 その他 その他 その他	異常児健康問題 保育学 小児科学 音楽実習 遊戯，ダンス実習 異常児教育課程及教育方法 臨床心理学 異常児職業教育 異常児教育実習

出典 『北大百年史 部局史』1980年，414-419頁。

(2) 北大幼児園の整備

城戸は、1951（昭和 26）年、学部長として着任し、次のように回想する²²。

窓から外を眺めると、広々とした校庭で子どもたちが野放しにされていて、いたずらをしたり、けんかをしたりして遊んでいました。

戦後、教育研修所長をしていたとき、やはり、研修所の所員の子どもたちが野放しにされていたので、集めて保育園をつくって保育したことがありました。幼児教育の重要性を口にしながら、これらの子どもたちを野放しにしておくことはできないと考えて「幼児園」をつくることにしたわけです。

また、城戸は「子どもの教育を受ける権利を保障するために子どもの親たちが教育を受けさせる義務を果し、教育に責任をもつすぐれた教育者を選んでその生活権を保障することは、教育の民主主義の基本的なあり方そのものであり、幼児園はそのモデルケースであるという理念」を述べる²³。城戸は文部省に附属幼稚園としての正式認可を何度か要請したものの、認可されなかった。そこで地域の保護者が結成した楡の会が経営を担い、1952（昭和 27）年 5 月、野外保育を開始し、11 月 15 日、北大幼児園が発足した。古電車 3 台を保育室に改造し、120 名の園児で、電車の幼稚園が開園する（図 2）。開園式には、札幌市長の高田富与（1892-1976）も参列する。古電車については、札幌市から払下げを受け、その交渉には、研究主任となる助教授の中川^{とよ}と保育主任となる林田栄が行う。

主事となる教授の奥田三郎（1903-1983）は、以下のように述べる²⁴。

11 月 15 日、七五三の佳日に、北大幼児園が開園式を挙げた。本園は、その名の通り、保育所でもなく、幼稚園でもない。この中間に行くものである。目的は、幼児教育の研究を主とし、併せて地域社会の要望に応じ、研究と実践をマッチさせて、些か貢献しようという点にある。元来は、教育衛生研究室の仕事の一つとしてチャイルド・クリニックを設け、同時に特殊児童を主とした保育教育をやろうとの意図から出たのであるが、この準備を進めている間に、近隣社会からの要望が強くなり、今日にみる如く、忽ちにして 120 名程を取扱う幼児園になったのである。従って、施設は甚だ不十分で、色々、難問題に当面している始末であり、第一の急務は、ホールの確保である。幼児教育の問題は、特殊児童に対する早期教育の問題も含めて、未解決の事項が山積みしている。これを、現実に置かれた条件下に於いて、一つ一つ解決して行こう、と努力している次第である。各方面の御支援を願いたい。



図2 北大幼稚園開園の記事

出典 『北海道新聞』1952年11月16日。

表3の年譜の通り、北大幼稚園は整備され、図3の通り、卒園児も増加していった。

表3 年譜

年 月	内 容
1950 (昭和 25) 5	北海道大学教育学部に特殊教育講座(奥田三郎教授)が設置。 →特殊教育対象児のための早期保育実験室を設けたい。
1951 (昭和 26) 10	東京で保母長をしていた林田栄が着任
1952 (昭和 27) 5	城戸幡太郎学部長は、一般の幼児の保育と研究ということが必要である という考えから、野外保育を試みる。 →文部省等へ要請したものの、附属幼稚園としての正式認可は困難
10	古電車3台を現クラーク会館前の芝生に置き、改造して保育室として使用
11	「北大幼稚園」という名称で保育が開始され、母親たちの団体による「楡 の会」が経営。主事：奥田三郎、研究主任：中川時代、保育主任：林田 栄、保母：大塚恵子、門脇貴美子
1953 (昭和 28) 1	中川時代、急逝
3	第1階卒業式
10	三宅和夫(教育心理学)が助手として着任し、研究主任となる。
1954 (昭和 29) 6	北大学生ホールが完成し、園舎として昼間使用。電車の保育室もホール の脇へ移動。
1955 (昭和 30) 8	日本教育学会大会が北海道大学で開催。→バザーを開く 「児童文化講座」がきっかけで、「保育問題研究会」が組織される。
1957 (昭和 32) 3	城戸が定年となり、三井透教授が学部長に就任。 学生ホールが解体されることに伴い、野外保育を中心に行う。
6	教育学部敷地内に独立の園舎が完成し、電車3台も移される。
10	約20坪の増築
1961 (昭和 37) 3	三井が定年となり、鈴木朝英教授が学部長に就任。
6	電車保育室老朽のため撤去。保育実験室、物置を建設。
9	創立十周年を記念し、懇談と懇親の会合
1966 (昭和 41) 3	文部省の行政指導により、幼稚園廃止され、発達心理学講座の「実験保

1978 (昭和 53)	育室」として、縮小され、園児数も 30 名以下となり、行動観察室 (109 m ²) のみ。
1979 (昭和 54)	その後、野外行動観察場設置。 「附属乳幼児発達臨床研究センター」の設置が認められる。
2006 (平成 18) 4	附属研究施設「乳幼児発達臨床研究センター」新築に伴い、センター内に移動。 (集団行動実験室、行動分析室等をもつ 2 階建て 580 m ² の建物)
2010 (平成 22) 3	「附属子ども発達臨床研究センター」と改称に伴い、「教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター幼稚園」(通称、北大幼稚園)となる。 幼稚園は閉園

出典 『十年のあゆみ』1962 年, 1-5 頁, 『北大百年史 部局史』1980 年, 383-385 頁から作成。

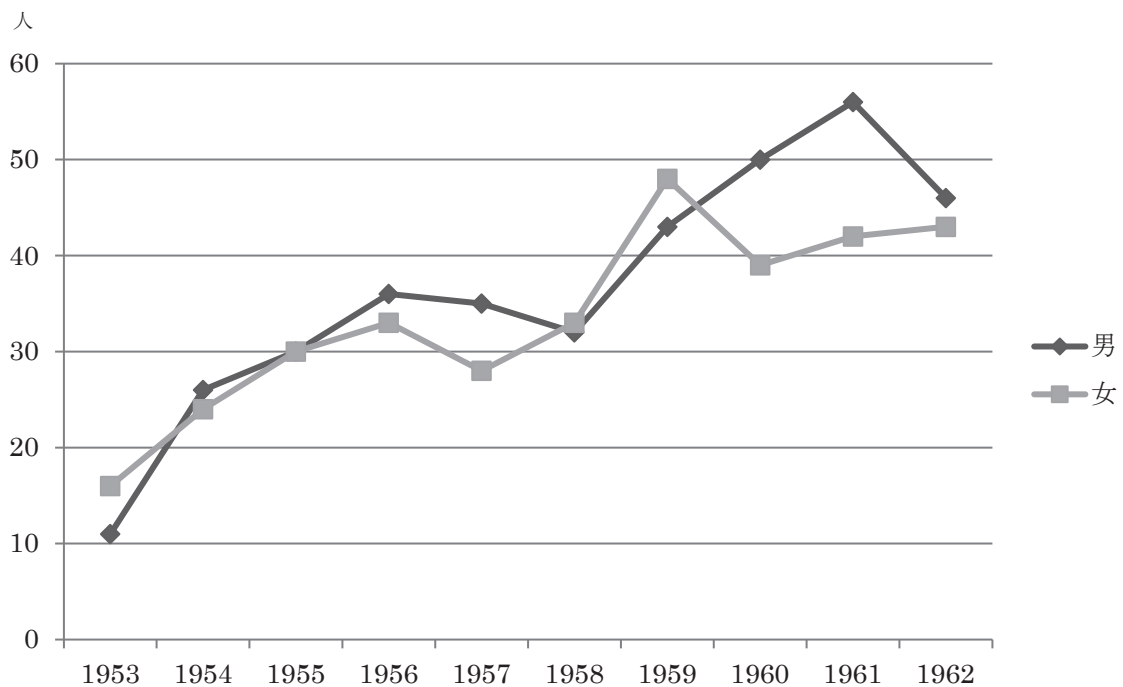


図 3 卒園児数

出典 『十年のあゆみ』北大幼稚園, 1962 年, 5 頁から作成。

2. 北大幼稚園

(1) 保育内容

「保育の目標」は以下の通りである²⁵。

ある特定な層の子どもということではなく、すべての層の子ども、さまざまな違った環境の中にいる子どもに対する保育ということ、具体的にはどんな仲間ともなかよく遊ぶことができ、仲間の中でのびのびと活動できるようにさせるということなのです。また子どもたちがこれから先いろいろな社会の中に入って生きていく時に、心身ともに健康で、すこしのことにはへこたれない、がんばりのきく人間であることは大切なことだと考え、この点もいつも念頭に置いて保育が行われております。したがって、子どもをあれこれといじりまわさないで、その自然に伸びていこうとする力を、十分にあ

らわすことができるようにしてやることを心掛けています。云いかえれば、幼児を本来限らない発達の可能性を秘めたものとして考えて、その発達を促進するような条件をできるだけ準備してやるようにと配慮しているのです。

また、云うまでもなく幼児教育ということは、母子一体の教育でなくてはならないのですから、常に家庭との連絡や母親への面接指導等によって、園と家庭とが密接につながることによって幼児としての望ましい姿をととのえるように努力をしております。

1950(昭和25)年2月、福村書店から城戸幡太郎『幼児の教育』が発行される。これは1939(昭和14)年、賢文館から発行された『幼児教育論』を一部改訂したものである。ここでは『幼児の教育』に基づき、城戸の幼児教育観を整理しておきたい。

城戸は子どもの指導に関して「社会性の陶冶」を重要視し、子どもの生活指導として以下の12事項を挙げる²⁶。これは戦前から一貫している。また、上記の「保育の目標」は、「社会性の陶冶」を重要視していることが分かる。

- 一、他人に不快な気持を与えないようにし、自分には不健康なことをせぬこと
- 二、自分勝手な振舞をせぬこと
- 三、互に力を協せ、親切にすること
- 四、我慢をすること
- 五、物を大切にすること
- 六、物を清潔にし、秩序正しくすること
- 七、規律を守ること
- 八、一生懸命にやること
- 九、自分のことは自分でやること
- 十、何でも自分で工夫すること
- 十一、陰日向のないこと
- 十二、行動を機敏にすること

上記は「情操教育、性格教育」として位置付け、次のように述べる²⁷。

それは子供の遊びなり、仕事なりを通じて訓練されることで、これまでの幼稚園で行われていた観察や談話や手技や唱歌や遊戯の如き保育項目は教材ではなく、子供が社会生活を営むに必要な機能を示したもので、それらの内容に子供の生活指導をなすに必要な教材を盛って行かねばならぬのである。そして、それらの教材は子供の生活に即して、身近のものから選び、直接子供の生活に役立つようなものでなくてはならぬ。

「子供の社会生活は遊びである」とし、「しかし、それは纏りのない遊びである。それに纏りをつけ正しい形態を与えて、その内で楽しく遊ぶことのできるようにしてやるのが遊戯の指導である」と「遊び」を定義する²⁸。「子供の遊びは模倣遊戯から競争遊戯に発展する」とし²⁹、「子供の社会性を陶冶しようとするれば、競技の裡に含まれている社会的協同の精神を十分に発揮さすように注意しなければならぬ」と指摘

する³⁰。さらに指導の方法として「生活の演劇化」を打ち出し、次のように説明する³¹。ここでもプラトンの思想が紹介され、音楽と体操が重視されている。

これは子供の遊戯を生活化し、技術化し、社会化すると同時に、それを更に芸術化することである。一般に芸術はわれらの生活の裡に認められる人生なり社会なりの問題を、いろいろな様式によって表現することであるが、その表現は単なる現実生活の再現ではなく、その裡に認められた問題を明確に把握せしめ、それに対する理解を深化し強化する特殊な技巧である。演劇は特に他の芸術に比して、かような方法によって最もよく生活問題を芸術化することができるものであるから、これを子供の生活に適用することは、子供に子供自身の生活問題を自覚さすには最も有効な方法となる。(中略)

それに演劇は一つの総合芸術であるから、それによって正しく、美しい言葉の訓練もできれば、唱歌や舞踊の練習もでき、舞台装置のために手技の協同作業もできるのである。しかし、生活の演劇化は必ずしも子供に実演させなくても、人形芝居や紙芝居などによって行うこともできるのである。

かように子供の遊戯は、それを生活化し、技術化し、芸術化することによって、子供の生活を指導することができるのであるが、遊戯からは更に音楽と体操が導き出されるのである。リトミックの如きはその例であるが、子供の生活にあらわれる自然のリズムを芸術化し、社会化して健全なる身心を発達させることは極めて大切なことである。ギリシアの昔から体操と音楽とは離すことのできぬものと考えられていたが、幼児にとっては、音楽のない運動は窮屈なものであり、運動のない音楽は無聊なものである。それで子供を幼稚園や保育所で精一杯に活動さすためには、どうしても音楽が必要なものであって、音楽は単に唱歌の伴奏だけに必要なのではないのである。中国では古くから礼と楽とは離すことのできぬものと考えられていたが、生活を規律正しく優美なものにするには音楽は極めて重要な役目を果たすもので、儀式などに音楽がなかったならば、儀式の壮美性はなくなってしまうのである。幼稚園や保育所で行われる子供の集会は子供の生活における一つの礼であり、儀式であって、子供の社会性を陶冶するには必要なものであるが、これには必ず壮麗な音楽を加えて子供の情操を陶冶することに努めなければならぬ。そしてこの集会を利用して教師は子供に話を聴かせてやる。

「リトミック」が一例として挙げられる。北海道大学教育学部の発足当初には、スタインウェイの古いピアノ1台と新しく買った3台のピアノがあったが、音楽専攻の学生の練習に使用されており、幼児教育に活用されることはなかったと推察される³²。また、北大幼稚園には、ピアノはもちろんのこと、ホールもなかったため、リトミックは実践されていなかったと考えられる。

では実際にどのような保育内容が展開されていたのであろうか。表4は、北大幼稚園において、1954(昭和29)年の夏季休暇中に実験された、特別に計画した保育内容の単元を一覧にしたものであり、造形的な表現活動に占められている。しかし、一日の保育の流れに関しては、「朝のご挨拶」、「紙芝居」、「お話」、「歌のけいこ」、「簡単なお遊戯」、「スキップ」、「砂遊び」、「一日の反省の話合い」等が行われ³³、音楽的な表現活動や身体的な表現活動も実践されている。また、「簡単なお遊戯」も含まれ、上記の城戸の言及する内容が行われていることが読み取れる。

表4 単元の内容

期間	単元	概要
7/21 ～	<ul style="list-style-type: none"> ・皆で仲よく ・買物ごっこ 	<p>画用紙に果物や魚等を描き鋏で切り抜いたもの、粘土細工で拵えた色々な物が買物の材料となる。</p> <p>又色紙細工の財布、ザラ紙で作ったおかね等を皆で拵える。二名宛交替で店主となり、売物の材料をあずける。買い手は、「ごめん下さい」、「これおいくらでしょうか」、「ありがとうございました」等、実際に大人が使っているものの中の簡単な言葉を使わせた。店主については、「いらっしゃいませ」、「何あげますか」、「ありがとうございます」、等の言葉をはっきり言わせる。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・お池の魚 	<p>縦110cm、横80cm、の紙にお池を描き、この中に魚を泳がせる。先ず、クレヨンで、用紙に魚を描き、これを各自鋏で切り抜いて、お池の上に貼布するのである。魚の種類も、大きさも自由にさせる。</p>
7/31 ～	<ul style="list-style-type: none"> ・七夕 	<p>柳の枝を用意して、幼児の作った短冊を結び付ける作業である。</p>
8/11	<ul style="list-style-type: none"> ・動物遊び 	<p>自分の好きな動物を選んで、画用紙に動物を描き、切り抜いて各自お面を作る。このお面をつけて四つん這いになり、その動物の鳴き声を出し乍ら歩き廻る。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・葡萄園作り 	<p>葡萄の実や、葉を描かせ、これを切り抜いて黒板や、大型の紙に描いた葡萄の枝に貼りつける。又草花の絵を描いて切り抜き、花園を作ることもさせる。</p>

出典 木村謙二・上山明子「問題を持つ保育についての実験的研究」『教育心理学研究』第3巻第2号，日本教育心理学会，1955年，27頁。

その他，図4の通り，運動会も開催された。



1953年 教育学部幼児園の運動会 現在の図書館前庭 左の建物は畜産学講堂

図4 運動会 1953(昭和28)年

出典 『写真でつづる教育学部50年』北海道大学，1999年，12頁。

(2) 人的環境

表5は、教員を一覧にしたものである。城戸は「教育の効果をおさめるための第一の条件は、すぐれた教師を採用することで、施設は、第二の条件」と考え、保育のベテランである林田栄を教育学部の教務職員として採用し、保育主任を任せる³⁴ (図5)。

表5 教員

		1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962
主事	奥田三郎 教授											
研究 主任	中川時代 助教授											
	三宅和夫 助手											
保育 主任	林田栄											
教諭	大塚 恵子											
	門脇貴美子											
	唐沢 幸子											
	堀井 愛											
	北出富志子											
	掘 玲子											
	西山美智子											
	長尾 国子											
	西村 恵子											
	本間房子										※	
	笠原紀子										※	
	川村京子										※	
	高砂博子										※	
香川典子										※		

出典 『十年のあゆみ』1962年，12頁から作成。

注 ※：着任年不明。



図5 保育主任の林田栄（左）

出典 『写真でつづる教育学部50年』1999年，11頁。

ここで『幼児の教育』に基づき、城戸の理想とする保育者像を整理しておきたい。城戸は「幼稚園や保育園の教師は、子供を通じて、家庭教育や社会教育に関する問題を発見することができるが、それらの問題を解決するには、教師は子供を教育するのみではなく、子供の教育を通じて両親を再教育するだけの教養を持っていなければならぬ」と言い切る³⁵。前掲の「保育の目標」でも「母子一体の教育」がうたわれ、一貫している。また、「子供の生活指導に最も大切なことは、この慈愛と権威とを兼ね備えていること」を挙げ³⁶、次のように解説する³⁷。

権威は、単なる命令と服従との関係ではなく、威厳と敬服との関係でなくてはならぬのであって、それに権威には必ず慈愛が伴うものであるから、権威を以て指導されたものには必ず感謝の念が伴うものである。それでは教師はどうしたら子供に対して権威を持つことができるか。それには何よりも子供を心から愛し、いつも子供のことを心配しているという態度がなくてはならぬ。

さらに「教師は自分の仕事について子供に感心させるだけの力量を持っていねばならぬ」とする³⁸。前述の通り、「教養」の重要性を主張する。教養に関しては、下記の通り言及する³⁹。

教師は生まれながらにして教師であったのではなく、教養によって教師となったのである。教養とは人間にあるものでなく、人間になることである。教育とは人間が生まれながらに持っているものを引き出してやること即ちエルチャーウングであるというのは翻訳思想であって、教育といっても教養といっても同じことで、教育とは教養を与えることである。それでは人間になるとは何になるのであるか。ロマンチックの思想では教育とは人間が人間になること即ち人間が自からのうちに人間性を自覚することであると考えた。しかし、この人間性という概念にはいろいろの意味が含まれていて明瞭に捉え難い。そこにヒューマンイズムの特色が認められるので、教養ということも人間性という意味で曖昧にされてきた。人間が人間になるということは人間が社会的人間即ち社会的協同生活において職能的義務を果し得る人間になることでなくてはならぬ。文化ということも人間の社会的協力を可能にする職能的教養であり、かような意味で文化人とは教養ある人間であるといえる。

上記の『幼児の教育』の引用は、「保姆」が「教師」に改められたことを除いて、1939（昭和14）年の『幼児教育論』と同一の文章であり、この城戸の保育者像は、戦前に構想されたものである。「ヒューマンイズム」や「文化」も挙げられ、「教養によって教師となった」と「教養」の重要性を主張する。城戸は教育科学研究会においても教育者の教養の向上を主張し、一致している⁴⁰。

1946（昭和21）年8月、教育刷新委員会が発足し、教員養成および教員に関する問題について長期にわたって議論された⁴¹。城戸も委員であり、小学校教員の場合、「普通の学問よりもむしろヒューマンティの教養の方が大切」と述べ、「国民教養」を主とする「国民大学」において教員養成を行うことを提案する⁴²。「教員だけを養成する学校が出来ると型にはまった人間が出来てしまう」と危惧しながらも、「幼稚園であるとかあるいは盲聾啞学校の教員というものは特別な訓練を必要とする」と保育者養成の独自性を認め、教育科学的教養の重要性を強調する⁴³。

(3) 物的環境

表3に示した通り、創立当初の1952(昭和27)年には、古電車3台が保育室として使用された。北海道ということもあり、ストーブが付けられた。遊具としては、砂場、滑り台、ブランコが整備された(図6~8)。120名の子どもがいたため、古電車3台では手狭であったため、広大で自然豊かな北海道大学のキャンパスを活用した野外保育も展開された(図9)。

1954(昭和29)年、北大学生ホールが完成し、昼間、園舎としても使用できることになり、古電車の保育室や遊具もこのホールの脇へ移動した。

1957(昭和32)年春、クラーク会館建設施設を整備するため、北大学生ホールが解体されることになり、再び野外保育を中心に実践が展開される。

1957(昭和32)年6月、教育学部敷地内に園舎が完成し(図10)、古電車3台も同敷地内に移動する。10月には、園舎西側約20坪、増築され、物的環境も整備される。遊具としては、ジャングルジム、太鼓橋、遊動円木、鉄棒、シーソー等も加わる。また、城戸からオートスライドの映写機とテープレコーダーの寄贈を受け、視聴覚機器も整備される。

1961(昭和36)年、老朽化した電車保育室が撤去され、新たに実験保育室と物置が建設される。



電車が備えつけられたころ(昭和27年秋)

図6 電車の幼稚園

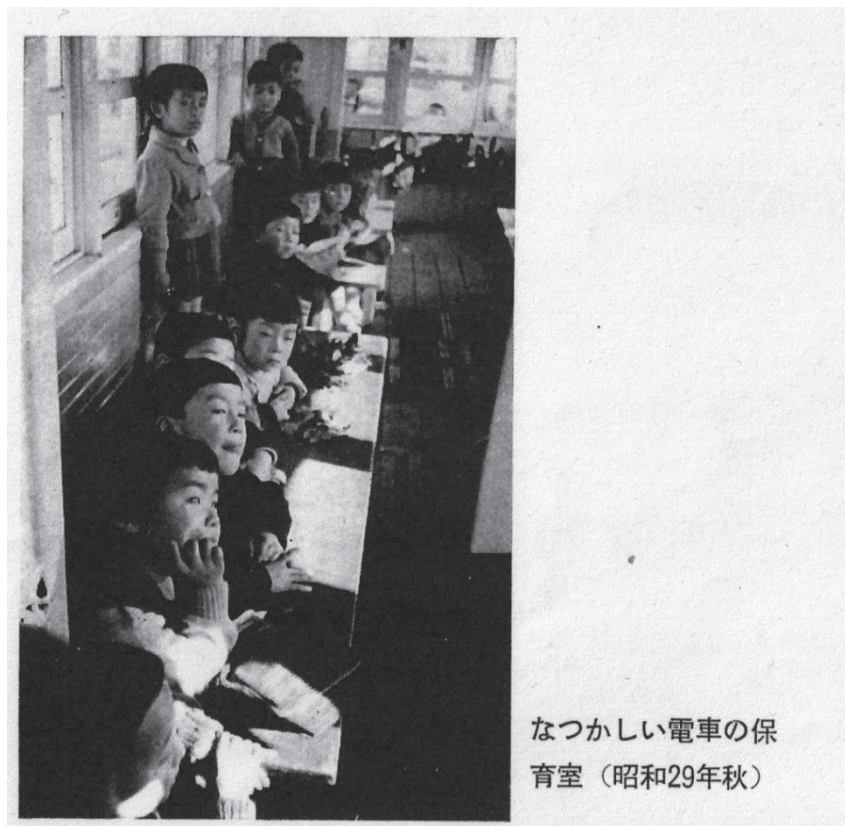
出典 『十年の歩み』1962年, 0頁。



砂場ができたころ—現クラーク
会館前あたり—(昭和27年秋)

図7 砂場

出典 『十年の歩み』1962年, 0頁。



なつかしい電車の保
育室(昭和29年秋)

図8 古電車の保育室

出典 『十年の歩み』1962年, 0頁。



図9 ポプラ並木での野外保育
出典 『十年の歩み』1962年，0頁。

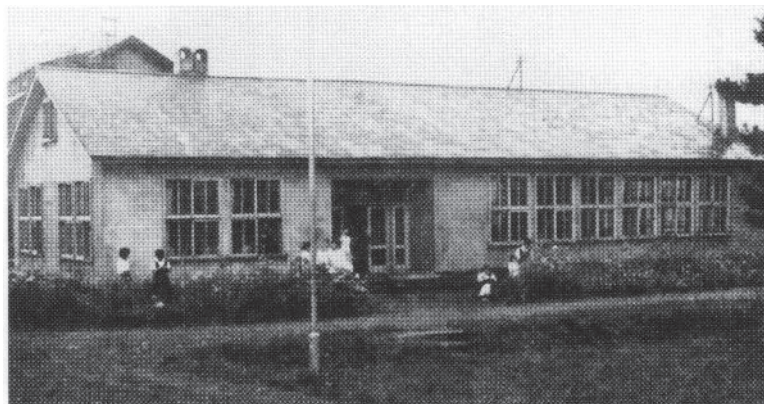


図10 教育学部幼稚園園舎
出典 『写真集北大125年』北海道大学，2001年，45頁。

以上、北大幼児園の保育内容は、『幼児教育論』に示された「社会性の陶冶」が重要視されていた。また、物的環境より人的環境を重視する城戸の考えに基づき、保育のベテランである林田栄を保育主任として採用し、「母子一体の教育」を目標としていた。

3. 実践研究

(1) 北海道大学教育学部における実践研究

1953（昭和28）年1月、研究主任であった中川時代が急逝したため、同年10月、三宅和夫が、助手として北海道大学教育学部に着任し、北大幼児園の研究主任となる。三宅は、1952（昭和27）年、東京大学

文学部心理学科を卒業し、大学院に在籍していた。卒業論文は「児童小集団の構造の変容について」に取り組んだ。三宅は、1953（昭和28）年の春、城戸の東京の自宅において出会ったときのことを次のように回想する⁴⁴。

さて、私は先生のお宅へ緊張した気持でうかがったのであるが、先生は最初に「君は子どもを対象にした研究をやったようだが、子どもは好きなのかね」と尋ねられ、返答に窮したのである。「よくわかりません」とかいささか曖昧なことを述べたようである。それから先生の北大にある古電車の幼稚園（北大幼稚園）についてのお話が始まったのである。先生が幼児や母親や保育者のことを熱をこめて語られ、心理学研究の批判をされるのを聞いているうちに、私は遠い北国に行ってみようかという気持が自分の中で次第にはっきりしたものになっていくのを感じたのである。「北大へ来たら君には主に幼稚園の子どもにかかわってもらいたい」と先生に言われたときは、不安がいっぱいであったことを覚えている。なにしろそれまで幼い子どもなどともに観察したことはなかったのであるから。

北海道大学に着任後は、毎日を幼児、母親、保育者とともに過ごし、「当時幼稚園で午前中子どもたちとあそび、午後母親と話をしたり家庭訪問をしながら、これで一体いつになったら心理学の論文が書けるだろうか、などと真剣に悩んだ」と告白する⁴⁵。しかしながら、次のように子どもに興味を抱くようになる⁴⁶。

予想もしない仕事を与えられた私はいささか戸惑いを感じつつ、幼児たち一人ひとりに違いがあり、またそれぞれが時の流れとともに変化していく姿に接しているうちに、幼児の個性がどのようにしてできあがっていくかに興味を抱くようになったのである。また、自然場面での行動観察、知能検査、家庭訪問による母親面接という学生時代にほとんど経験していなかった仕事が、子どもを理解するには非常に重要であることが次第にわかるようになってきたのである。

また、三宅は、城戸を次のように言及する⁴⁷。

先生が行動主義に一定の評価を与えつつもそれに飽き足らず、なんとかそれを乗り越えようと苦心され、そのことが動機となって教育問題に強い関心を抱くようになられ、実践家との交流を深めようとされたことを窺い知ることができた。つまり先生のなかでは理論と実践はきちんと結びついているのである。（中略）

また先生は子供のことについて心配しているからこそ子供のことを問題として研究をしようとする姿勢ができるのであり、子供をたんなる存在として、それをいわゆる科学的方法で明らかにしようとする態度では子供の問題は解決できないということを主張しておられた。戦後間もなく国立教育研修所長になられた先生が所内の一室を所員の子供達のための保育室とされたり、1926年に北大構内に古電車の保育室として有名だったモグリの幼稚園を開設し、近隣の子供達を集め、母親達を組織したのも幼い子供達への愛情もさることながら、そうした保育の場がなくては子供の研究などできないといった強い信念からであったのである。

表6は、発表論文を一覧にしたものである。

表6 発表論文

著者	題名	誌名	年
三宅和夫・奥山わか子	幼児の社会性の発達に及ぼす教師の交渉の影響について	『教育心理学研究』3巻2号	1955
木村謙二・上山明子	問題を持つ幼児の保育についての実験的研究	『教育心理学研究』3巻2号	1955
三宅和夫	施設における幼児のあそびと玩具について	『北海道保育問題研究会会報』2号	1955
三宅和夫	視聴覚保育の実験的研究	『新しい教材』29号	1956
北大幼児園	一人一人の子どもを正しく理解すること	『北海道保育問題研究会会報』6号	1956
奥田三郎	保育記録について	『北海道保育問題研究会会報』7号	1956
三宅和夫	就学前幼児の数概念の発達	『北海道保育問題研究会会報』11号	1957
三宅和夫	幼児の数概念の発達と生活環境	『教育実践講座』算数・数学編, 国土社	1958
三宅和夫	幼児の自立行動と母親の期待度	『日本心理学会発表論文集』	1961

出典 『十年のあゆみ』1962年, 7-8頁。

三宅は、以下の通り、北大幼児園において「幼児の社会的行動の発達に及ぼす成人（教師）の交渉の影響について」を行い、『教育心理学研究』第3巻第2号（1955）において成果を発表する⁴⁸。

<研究の目的>

あるがままの教師を含めた幼児の集団の構造を成員の相互交渉過程を分析することによって明らかにし、そこにどのような問題がひそんでいるかを知らうとした。

<研究の対象>

1953（昭和28）年度の北大幼児園の一つの組

1人の教師と27名の幼児

<研究の方法>

幼児と教師の相互交渉を観察記録することにより各幼児と教師との結合関係を分析する。

教師との結合関係の強い幼児をいくつかの方法で除いてみて、その時ののこりの幼児達と教師との間の相互交渉関係がどのように変わるかを観察記録によって知る。

その他、特殊教育講座には、助教授として木村謙二がいた。木村は、以下の通り、北大幼児園において「問題を持つ幼児の保育についての実験的研究」を行い、『教育心理学研究』第3巻第2号（1955）において成果を発表する⁴⁹。

<研究の目的>

知能の遅滞や、問題行動を持つ幼児に対して、一定期間特別に保育を行い、その効果がどの様に現れたかを見ようとする。

<研究の対象>

北大幼児園の幼児

1954（昭和29）年度の入園児17名

1955 (昭和30) 年度の入園児 18名

選択の方法としては、初めに桐原氏による自由画知能検査法により、低位、中位、高位の3群に分類し、この中の低位群を選んで、実験者の観察、ならびに担当保育の観察等を資料とした。

<研究の方法>

知能、問題行動の略々伯仲したもの1組ずつを作って一方を実験群、他方を統制群とした。

実験群に対しては、第一学期の保育の終了した1954 (昭和29) 年7月21日から、夏季休暇の終わった8月21日までの1ヶ月間に、特別に計画した保育内容によって実施した。

保育の効果を検討するために、実験幼児群の行動を詳細に観察記録し、又実験群、統制群について実験保育実施前後に幼児の行動評定、社会的生活能力調査、知能検査を行って、両群の比較をすることによって保育の効果を検討した。

このように健常児との交流を意図した保育が展開され、統合保育の萌芽が確認できる⁵⁰。北大幼児園は、研究主任の三宅を中心として大学教員により、研究調査のフィールドとして活用され、成果も発表された。その他、学部卒業論文として、表7に示す題目があり、幼児教育を研究対象とする学生にも活用された。

表7 学部卒業論文

著者	題名	年
石黒寿美子	幼児の動的グループと性格について	1954
奥山わか子	社会性発達の要因の考察	1954
唐津愈	子供のヴァイオリン指導方法について	1954
上山明子	問題を持つ幼児の保育についての実験的研究	1955
鈴木尚	遊具の購入使用の調査	1956
辻岡和枝	幼児・低学年児童の音楽生活及び音楽指導原理	1956
宮内克男	就学前児童における数概念の発達	1957
荻野京子	幼児の攻撃的行動についての一研究	1961
長沼滝衣	母親の自立成就への期待と幼児の行動	1961

出典 『十年のあゆみ』1962年、8-9頁。

(2) 北海道保育問題研究会

城戸の提唱により、1936 (昭和11) 年に「保育問題研究会」が発足し、機関紙『保育問題研究』が発行され、会員は東京を中心に累計500人余いた。1943 (昭和18) 年、一旦幕を閉じ、活動の一部は愛育会内の「日本保育研究会」に引き継がれた。戦後、保育問題研究会は東京で再開されたが、現在の日本保育学会の源流でもある⁵¹。

北大幼児園が中心となって、1953 (昭和28) 年、「北海道保育問題研究会」が誕生する。誕生したきっかけとしては、城戸の「保育所と幼稚園がなぜ、別々の研究会をするのか、教育という点から見るとそれぞれの立場にとらわれないで、お互いに協力して研究していかなければならない」という考えからであった⁵²。城戸は、常に子ども一人ひとりの行動の観察記録をとることの重要性を主張した。

三宅和夫もかかわっており、「はじめの1年間は、とくに一人でも多くの人が研究にくわわってもらえるように重点をおいた」と回想する⁵³。しかしながら、保育所関係者が来なくなり、幼稚園関係者が中心となってしまった。

1957 (昭和32) 年、城戸は北海道大学を退職し、中央大学教授となる。城戸が出席した最後の北海道保

育問題研究会において次のように、研究会への母親の参加を求めている⁵⁴。

保育の事は以前より色々の事が取り上げられてきたが、昔と今とはその問題が殆んど変わっていない。様々な問題の研究を重ねてきても、いっこうに実行されず未解決である。問題を研究するのは、保育の実践にあたっている人々や研究者であるが、多くは政治の問題となってくる。

この点については、政治の任にあたる人々に責任がある事は申すまでもないが、研究をし、解決を要求する側の人々にも責任がないとは言えない。研究会のようなもの、単なる報告や発表という形から進んで一つの運動組織にならなくてはならない。そのためにも教師や研究者だけのグループであっては不十分で、ぜひ母親と一緒にやってやるべきだ。

つまり、研究会の性格をもっと社会的な、ものにしていくことが何よりも必要である。それを実行するためには、研究の問題そのものを、これ迄より更にはっきりしたものにする事が大切である。

さらに城戸は、幼稚園と保育所の一元化や幼児教育の普及、小学校との関連についても言及し、保育の方法についての今後の研究課題を指摘する⁵⁵。

日本においては、これまで、大抵保育室中心の保育が行われてきた。諸外国を見ると、保育室中心のものもあるが、戸外中心保育を行っているところもかなりあり、相当の効果をあげている。この二つについて（室内保育、戸外保育）どのようなよい点があるのか、また、どのような配慮が必要かということについて研究しなければならない。また、どのような配慮が必要かということについて研究しなければならない。

特に農村などでは、両方の保育を考えていくことが、幼児教育の普及という点でぜひ必要なことだろうし、農村のみならず、現在の日本の経済状態ではどうしても戸外保育の方法を考えなくては、幼児教育の発展はのぞめないだろう。

また、自由保育と一斉保育の問題で、どちらがよいか悪いかという問題ではない。この二つをどのようにかみ合わせたらよいか研究すべきである。

以上、実践研究は、研究主任の三宅和夫が中心となって行い、北大幼稚園がフィールドとして活用され、『教育心理学研究』等に成果が発表された。一方、1953（昭和28）年、城戸の提唱により、「北海道保育問題研究会」が発足し、幼稚園と保育所が一体となった研究会が試みられた。

おわりに

CIEのイールズらの強要により、旧帝国大学にも急きよ、教育学部が新設されることになり、北海道大学でも教育学部が誕生した。イールズは、北海道大学と北海道第一師範学校、北海道第二師範学校、北海道第三師範学校との再編を望んでいたが、師範学校側に反対意見が多く、北海道大学教育学部は単独で、教育行政専門家、教育学研究者の養成を主たる目的とした。1951（昭和26）年、城戸幡太郎が学部長として着任し、「教育科学」や「生活主義と科学主義」が強調された学部の構想が打ち出され、体育や音楽、障害児教育も重視された。保育者養成を含め初等教員養成は行われていなかったが、幼児教育関係の科目が複数開講され、独自性のあるカリキュラムが展開されていた。

城戸は「幼児教育の重要性を口にしながら、これらの子どもたちを野放しにしておくことはできない」

と考え、1952(昭和27)年、古電車を保育室とした北大幼稚園が発足する。

北大幼稚園の保育内容は、『幼児教育論』に示された「社会性の陶冶」が重要視されていた。また、物的環境より人的環境を重視する城戸の考えに基づき、保育のベテランである林田栄を保育主任として採用し、「母子一体の教育」を目標としていた。

実践研究も積極的に展開され、研究主任の三宅和夫が中心となり、北大幼稚園がフィールドとして活用され、『教育心理学研究』等に成果が発表された。さらに1953(昭和28)年、城戸の提唱により、「北海道保育問題研究会」が発足し、課題はあったとはいえ、幼稚園と保育所が一体となった研究会が試みられた。

城戸は、保育学研究の第一の仕事について「問題解決の理論的基礎となる資料の収集」とし、「その時時の思いつきで収集したのでは価値がなく、問題の所在を明らかに意識して直接問題解決に必要な資料を計画的に遺漏なく収集することが肝要」と述べる⁵⁶。そのためには「実際家と理論家とが協議の上、資料収集の計画を立てることが必要」とする。その方法としては、「(一) 批判的方法、(二) 歴史的方法、(三) 実証的方法、(四) 実験的方法」を挙げ、特に「(三) 実証的方法、(四) 実験的方法」が重要とする⁵⁷。まさに北大幼稚園は、この城戸の方法を実現化したものである。また、戦前から戦後への変革の時期にあったにもかかわらず、北大幼稚園では、1939(昭和14)年に発行された『幼児教育論』の理念が活かされていることである。

城戸の理念には「幼児保育実践の中に問題を発見し、それを科学的に解決していくところに保育科学が発展する」という考えが根底にあった。しかし、高林朋恵・藤本友紀は、「「保育実践とは何か」という問いや、実践現場のなかにある実践者や子どもや実践状況に内面化されたものを炙り出していく方法論にはなり得なかった」と指摘する⁵⁸。今後は、聞き取り調査等を通して実践事例を入手し、このような課題についても検証していきたい。

鈴木慎一郎(鳥取大学地域学部)

付記

本稿は、日本保育学会第69回大会(2016年、於：東京学芸大学)において口頭発表したものを発展させたものである。

注

- 1 北海道大学『北大百年史 部局史』北海道大学、1980年、380頁。
- 2 間宮正幸「今日の間人発達科学と発達教育臨床の研究：「城戸構想」から「子ども発達臨床研究センター」へ」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第100号、北海道大学、2007年、3-24頁。
- 3 吾田富士子「戦後の北海道における保育者養成と実践教育：奥田三郎・稲垣是成・留目金治の実践と羊丘藤保育園設立の経験から」『藤女子大学紀要』第47号第II部、藤女子大学、2010年、62頁。
- 4 鈴木慎一郎「宮城師範学校から東北大学教育学部再編における保育者養成の動向」『日本保育学会第66回大会発表要旨集』日本保育学会、2013年、339頁。鈴木慎一郎「東京第一師範学校から東京学芸大学再編における幼稚園養成の動向：カリキュラムに着目して」『関西楽理研究』XXXI、関西楽理研究会、2014年、15-27頁。
- 5 寺崎昌男「第二章 大学における教員養成の出発」海後宗臣編『教員養成(戦後日本の教育改革第八巻)』

- 東京大学出版会，1971年，75頁。
- 6 渡部宗助「日高第四郎旧蔵資料拾遺：解説と資料目録」『国立教育政策研究所紀要』第131集，国立教育政策研究所，2002年，169頁。
 - 7 寺崎，前掲書，112頁。原文では，C女史，E博士と表記されていた。
 - 8 同書，113頁。
 - 9 北海道大学『北海道大学創基八十年史』北海道大学，1965年，223-224頁。
 - 10 城戸幡太郎『教育科学七十年』北海道大学図書刊行会，1978年，181頁。
 - 11 同書，183頁。
 - 12 民間教育史料研究会 中内敏夫・田嶋一・橋本紀子編『教育科学の誕生』大月書店，1997年，17頁。
 - 13 同書，32-34頁。
 - 14 北海道大学，前掲書，1980年，380頁。
 - 15 新潟大学二十五年史編集委員会編『新潟大学二十五年史 総編』新潟大学二十五年史刊行委員会，1974年，125-127頁。
 - 明神勲『戦後史の汚点 レッド・ページ：GHQの指示という「神話」を検証する』大月書店，2013年，115-128頁。
 - 16 明神勲「占領下日本の大学とレッド・ページ（その1）：北大イールズ事件の実証的研究」『北海道教育大学紀要 第1部C』第1号，北海道教育大学，1994年，15-27頁。
 - 関連する研究は以下の通り。
 - 梁田政方『北大のイールズ闘争：そう真実を明らかにするために』光陽出版社，2006年。
 - 大藤修『検証 イールズ事件：占領下の学問の自由と大学自治』清文堂出版，2010年。
 - 17 ニューフェルドは，C I Eに1948（昭和23）年に着任。オリンピックで槍投げ5位入賞の経歴があり，レクリエーション活動の普及を図った。
 - 鈴木慎一郎「フォークダンスの日本への普及と日本の民踊：中山義夫と鳥取県の民謡」『地域学論集』第16巻第3号，鳥取大学，2020年，9-10頁。
 - 18 北海道大学『北大百年史 通説』北海道大学，1982年，391-394頁。
 - 19 城戸，前掲書，186頁。
 - 20 北海道大学，前掲書，1980年，91-92頁。
 - 1956（昭和31）年，北海道学芸大学（現，北海道教育大学）に特別教科（音楽）教員養成課程が設置されるに及んで，北海道大学教育学部の音楽担当の教員は配置換えとなった。
 - 鈴木慎一郎「特別教科（音楽）教員養成課程設置による地方への音楽教員養成拡大：新制大学への再編の中で」『教育研究論集』第10号，鳥取大学，2020年，52頁。

 - 1974（昭和49）年，「保健体育学科」の実験学科科が図られる。1990（平成2）年，一般教育等「保健体育」が教育学科「健康体育科学講座」に改められる。現在，保健体育の中学校教諭・高等学校教諭の免許状も取得できる。
 - 北海道大学教育学部創設50周年記念事業委員会編『写真でつづる教育学部50年（1949～1999）：21世紀を展望して』北海道大学，1999年，30頁。
 - 21 高橋智「城戸幡太郎と北海道大学教育学部特殊教育講座の創設：大学におけるわが国最初の障害児教育研究組織」『特殊教育学研究』37（5），日本特殊教育学会，2000年，173-176頁。
 - 22 城戸，前掲書，187-188頁。
 - 23 北海道大学，前掲書，384頁。
 - 24 奥田三郎「北大幼児園が開かれた」『北海道大学教育学部・学報』第1号，北海道大学，1952年，3頁。
 - 25 北大幼児園『十年の歩み』北大幼児園，1962年，6頁。
 - 26 城戸幡太郎『幼児の教育』福村書店，1950年，164-165頁。
 - 27 同書，165頁。
 - 28 同書，184頁。
 - 29 同書，188頁。
 - 30 同書，188-189頁。
 - 31 同書，190-192頁。
 - 32 鈴木，前掲書，『教育研究論集』，2020年，52頁。
 - 33 木村謙二・上山明子「問題を持つ幼児の保育についての実験的研究」『教育心理学研究』第3巻第2号，日本教育心理学会，1955年，27頁。
 - 34 城戸，前掲書，1978年，188頁。
 - 35 城戸，前掲書，1950年，2頁。
 - 36 同書，162頁。
 - 37 同書，162-163頁。

- 38 同書, 163 頁。
- 39 同書, 89-90 頁。
- 40 民間教育史料研究会, 前掲書, 35-48 頁。
- 41 寺崎昌男「第一章 第四節 教育刷新委員会における制度改革の論議」海後宗臣編『教員養成 (戦後日本の教育改革第八卷)』東京大学出版会, 1971 年, 29 頁。
- 42 山崎奈々絵『戦後教員養成改革と「教養教育」』六花出版, 2017 年, 62 頁。
- 43 山田昇「第3章 学科課程の改革」海後宗臣編『教員養成 (戦後日本の教育改革第八卷)』東京大学出版会, 1971 年, 163-164 頁。
- 44 三宅和夫「発達研究に関するノート: 城戸先生との出会いとかかわらせて」『北海道大学教育学部紀要』第48号, 北海道大学, 1986 年, 2 頁。
- 45 同書, 2 頁。
- 46 三宅和夫「1 縦断研究との出会い」三宅和夫・高橋恵子編『縦断研究の挑戦: 発達を理解するために』金子書房, 2009 年, 3 頁。
- 47 三宅和夫「城戸幡太郎先生と児童発達研究の問題」『教育心理学年報』第29集, 日本教育心理学会, 1990 年, 10-11 頁。
- 48 三宅和夫・奥山わか子「幼児の社会的行動の発達に及ぼす成人 (教師) の交渉の影響について」『教育心理学研究』第3巻第2号, 日本教育心理学会, 1955 年, 65-127 頁。
- 49 木村謙二・上山明子「問題を持つ幼児の保育についての実験的研究」『教育心理学研究』第3巻第2号, 日本教育心理学会, 1955 年, 26-35 頁。
- 50 小笠原詠子・後藤守「北海道における統合保育の動向に関する研究」『北海道大学教育学部紀要』第55号, 北海道大学, 1991 年, 47-55 頁。
- 51 松本園子「保育問題研究会」保育小辞典編集委員会編『保育小辞典』大月書店, 2006 年, 310 頁。
- 52 北海道保育問題研究協議会『ひびき合いの保育研究: 北海道保問研 55 年の歩み 1953-2008』新読書社, 2009 年, 17 頁。
- 53 同書, 16 頁。
- 54 同書, 17-18 頁。
- 55 同書, 18 頁。
- 56 城戸幡太郎『幼児教育論』賢文館, 1939 年, 117 頁。
- 57 同書, 117 頁。
- 58 高林朋恵・藤野友紀「保育実践に迫るための方法論を求めて: 城戸幡太郎と倉橋惣三における保育実践観を手がかりに」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第86号, 北海道大学, 2002 年, 172 頁。